

編集後記

編集長(ダン シロウ)

いつものように、慌ただしく過ごしている。三月末で、足かけ18年在職した立命館大学大学院 応用人間科学研究科を定年退職になる。

スケジュールを見ていると、その後がゆっくりした生活になるなんてことは全くないので、基本、今と大差ないだろう。久しぶりに、五十才で京都府を早期希望定年退職した頃のことを思い出した。

先日、大学院の創志館で退職記念講演会を開いてもらった。その話の中でこの対人援助学マガジンについて触れた。私にとって、編集長を務めていることは誇りだ。それは仕事ではなく、使命だと思っているからだ。

今の時代に多くの対人援助職の方達が、ご自分の仕事や問題意識について、市民社会にしらしめるお手伝いという社会貢献。一人でも多くの執筆者がこの世界で認知されて、さらにそれぞれの使命を果たしていられるようにサポートすること。

これは七十才を超えた自分にとって、実に具合の良い生きがいである。八年前、この創刊を企画した時、こんなことを考えていたわけではない。続けて発行する決意はあったが、それが何を意味するものになるかなど、深く考えなかった。それがこんな存在になって今ある。世界は面白い。まだまだ、何か新たなことがあるに違いない。

*

今号からもまた、新たに二名の新連載がある。都合で休載の方もあるが、細く長く、継続のつもりです。幾久しく、どうぞよろしく。

編集員(チバ アキオ)

★ ある家族が喫茶店に楽しそうに入っていく。男の子は父に肩車をされている。女の子は誰よりも先にお店に向かい、他の家族が後ろについてきているのを振り返り「早くおいで！」と言わんばかり。一番後ろに母がついて

いく。その後ろには赤いフォルクスワーゲンビートルが止まっている。その店は喫茶店「こんちえと」。仙台市にある。店内にはそんな家族を描いた油絵が飾られているそうである。その様子をインターネットの食べログ的なもので観た。

今から40年前、私は5歳。その「こんちえと」の向かいの家に住んでいた。「こんちえとのおじちゃん」によくかわいがってもらった。よくお店に行くと、席にあるコーヒーシュガー(ザラメの砂糖、茶色くてがりがりしている)を食べていたのを覚えている。その時、おじちゃんには子どもさんがおられた。日曜日に行く「こんちえと」では「お兄ちゃん、まだ2階で寝ているから、起こしてきて！」と冗談で話しておられたのを覚えている。母に聞くと、母がいないときには私と妹を預かってくれていたりしたそうだった。

その油絵は、写真をアップした人によると1970年代のテイスト！という感じで描写されていた。…ん?!これ、当時の千葉家では?!家族構成も、車種もその色も当時の千葉家。そんな店が40年後もある。数年前、父と母は久しぶりに訪れている。当時2階で寝ていた息子さんがお店を継いでいるようだ。この油絵の存在を父母は知らなかったそうである。真相は、千葉家がモデルではないかもしれない。それでも、そうかもしれないと思っただけでも豊かな気持ちになった。あの時、確かに千葉家は仙台にいた。とにかくお店に行かないといけない。また、楽しみができた。

★ マガジン連載中の齋藤清二先生は「東日本・家族応援プロジェクト2017」報告の講評で「物語は新しくても、大昔のことを語るができるのです。過去は物語とともに成立するのです」(『はてしない物語』ミヒヤエル・エンデ 上田・佐藤訳)という一文を引用された。「対人援助学マガジン」という「社会的装置」は時代も記録する。このマガジンが確実に未来への可能性を広げるための今になっていることを再確認した。40年前の「油絵」がもたらした2017年の千葉に起こった物語。「こんちえと」に行くことで物語がまた始まる。

大谷たかし(オオタニ タカシ)

先月の25日、立命館大学において対人援助学マガジン編集長である団士郎先生の退職記念シンポジウムがあり、家族で参加した。語られたことから、感じたこと、

考えたことは多いが、一番心に残ったキーワードは「継続」だった。

新商品、流行、新しい資格等々、世の中は「ブーム」と言われるものが次々起きる。しかしながらその多くは、次のブームの波にさらわれ、誰にも気に留められないまま、廃れたり、忘れられたりされていく。景気がいい時に一枚かませてもらったら、ちょっといい思いができるかも…という動機づけで始める営みは、ブームの沈静化とともに、継続への力を失うだろう。

自分自身を省みれば、決して何かを続けることが得意な人間ではない。飽きっぽいし、集中力や根気を欠くし、新奇な刺激に目を奪われたりもする。いわゆる根性論とは、まったく相いれない。そんな中で、数は少ないが、続けてこられたこともある。このマガジンの執筆・編集も、そのひとつである。「継続」するものの背景に、継続のための「仕組み」があるのだとしたら。まもなく40歳の区切りを迎える我が身を思い、これまでそのような「仕組み」に支えられてやってこられた幸せを感じるとともに、自分が今いる場所で、小さくとも何かにつながる「仕掛け」を作れたら…そんな気持ちが芽生えてきている。

■ご意見・ご感想■

マガジンに対するご意見ご感想は
danufufu@osk.3web.ne.jp

マガジン編集部

604-0933 京都市中京区山本町438
ランプラス二条御幸町402 仕事場D・A・N

対人援助学マガジン

通巻32号

第8巻 第四号

2018年03月15日発行

<http://humanservices.jp/>

第33号は2018年6月15日
発刊の予定です。
原稿締切2018年5月25日！

常に新規執筆者を求めていますし、お誘いすることもあります。執筆依頼はしていません。自身の生活スケジュールに本誌「連載」を持ち、継続的に、自分の専門分野の今日記録を発信したいという方からのエントリーを待っています。

連載誌ですが必ず何回以上と決めているわけではありません。必要な回数(ずっと…というのがあります。多くの方達が連載8年目を迎えています)を、書いていただけるよう設定します。ご希望の方、編集長まで執筆企画をお知らせ下さい。

執筆資格は学会員であること。したがって書いていただく方には、対人援助学会への入会をお願いします。まだ登場していない、対人援助領域からの積極的参加を求めます。

対人援助学会事務局

〒603-5877 京都市北区等持院北町56-1
立命館大学大学院応用人間科学研究科内
TEL:075-465-8375 FAX:075-465-8364

対人援助学会事務担当

入会・退会・変更届

〒540-0021 大阪府中央区大手通2-4-1
リファレンス内
TEL/FAX 学会専用:06-6910-0103

表紙の言葉

子どもが減って、家族の結束は強くなり、なかなか出ていかない。やっと結婚したと思ったら、揉めて戻った実家の親同士がバトルに。こんなケースをいくつも担当した。その一方で、児童虐待を世論はあおりにあおっている。どちらも日本の現状には違いないが、さて、日本社会の未来を左右するのは、どちらの問題だろう。

少数でも、あつてはならないことはその通りだ。一方、数多く見られるからといって、自己責任論で放置して良いわけのない事もある。家族は面白くて大変だ。

(2018/03/15)